受刑者の自白理由と取調べの手法¹

和智 妙子² 渡邊 和美 横田 賀英子 大塚 祐輔 科学警察研究所

Lamb, Michael E. University of Cambridge

Prisoners' reasons for confessions and interviewing styles

Taeko Wachi, Kazumi Watanabe, Kaeko Yokota, Yusuke Otsuka (*National Research Institute of Police Science*), and Michael E. Lamb (*University of Cambridge*)

This study examined the relationships between the reasons for confessions and interviewing styles by administering a self-reported questionnaire to new male adult prison inmates across Japan. The three factors proposed by Gudjonsson and his colleagues (1991, 1992, 1994, 1999), namely, perception of proof, internal pressure, and external pressure, were investigated. When participants had decided to confess prior to interviews, they were more likely to confess due to perception of proof and internal pressure compared to their counterparts. Furthermore, participants who experienced a relationship-focused interviewing style, which stressed active listening and rapport-building while talking about the criminal incidents directly, were more likely to confess due to internal pressure and less likely to confess due to external pressure.

Key words: prisoners, reasons for confession, interviewing styles.

The Japanese Journal of Psychology

2017, Vol. 87, No. 6, pp. 611–621

J-STAGE Advanced published date: November 10, 2016, doi.org/10.4992/jjpsy.87.16002

近年、日本の取調べをとりまく環境は大きく変化している。2008 年から 5 都府県で裁判員裁判に係る事件について取調べの一部録音・録画の試行を先行的に開始し、2012 年 4 月には試行範囲を全国に拡大し、同年 5 月には知的障害者対象の取調べにも録音・録画の試行が開始されるようになった（菅・堤・小笠原・片野, 2012）。また、2012 年 12 月には PEACE モデルや認知面接など欧米諸国で既に実践・活用されている心理学的手法を組み入れたマニュアルとして、警察庁が「取調べ（基礎編）」を公表した（田崎, 2013; Wachi & Watanabe, 2015）。さらに、2013 年には警察大学校に取調べ技術総合研究・研修センターが設置され、各都道府県警察本部の警察官（警部）を対象に、年 6

回の研修を行っている。またこれに伴い、管区警察学校・各都道府県警察でも心理学的手法を組み入れた取調べの研修を実施している（栗野, 2014）。このように、捜査機関の取調べに関する心理学的知見の応用が近年急速に進んでいる。しかし、日本においては捜査面接、特に取調べに関する実証的研究はあまり行われてこなかった。

一方、欧米においては、取調べに関する研究が多く行われてきた。例えば Leo (1996) はアメリカで実際に行われている取調べを観察したり、録画映像を分析して、アメリカで当時利用されていた取調べ手法を検討した。Leo が対象にした 182 の取調べの事件の内容は、多いものから強盗(43%)、暴行(24%)、殺人(12%)、侵入窃盗(12%)であった。最もよく利用されていた取調べは「自供することが被疑者のためになることを訴える」(サンプルの 88%が利用)、「被疑者が犯人であるというはっきりした証拠で対抗する」(85%)、「被疑者が否認できるという自信を弱らせる」(43%)、「被疑者のアリバイや供述の矛盾を特定する」(42%)であった (Leo, 1996, p. 278)。

イギリスの研究 (Soukara, Bull, Vrij, Turner, &

Correspondence concerning this article should be sent to: Taeko Wachi, National Research Institute of Police Science, Kashiwanoha, Kashiwa 277-0882, Japan. (E-mail: wachi@nrps.go.jp)

¹ 本研究は第 1 著者が平成 26 年にケンブリッジ大学心理学科へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

² 本研究は、最高検察庁、法務省、警察庁の協力を得て実施した。ここに記して謝意を表す。

Cherryman, 2009)では、様々な罪種の 80 名の被疑者(暴行、器物損壊、子どもへの性犯罪、自動車盗、薬物関連の犯罪、放火、詐欺、万引きなど)に対して行われた取調べを検討した結果、証拠の提示(全体のサンプルの 99%が利用)、オープン質問(99%)、誘導質問(91%)、繰り返し質問(84%)、矛盾を強調する(75%)が頻繁に利用されていた。さらに、給付金詐欺者に対する 85 件の取調べを分析した Walsh & Bull (2012)では、22 の取調べ技術のうち、17 の技術は Soukara et al. (2009)と同じものを検討したが、証拠の提示(全体のサンプルの 100%が利用)、オープン質問(93%)、誘導質問(93%)、被疑者の供述に不適切に対抗する(86%)が頻繁に利用されており、Soukara et al. (2009)の研究とある程度一致する結果が得られていた。これらの研究は、被疑者取調べについての観察研究であるため、ある特定の取調べ技術の利用頻度や自白との関連については検討できるが、被疑者の内面、例えば自白の理由や感情について検討できないという問題点がある。

自白の理由

なぜ被疑者が自白をするかは、捜査員だけではなく、研究者にとっても重要なテーマである。イギリスでは、Gudjonsson (Gudjonsson, 2003; Gudjonsson & Bownes, 1992; Gudjonsson & Petursson, 1991; Gudjonsson & Sigurdsson, 1999; Sigurdsson & Gudjonsson, 1994)が犯罪者の自白の理由として「証拠の知覚(perception of proof)」、「内的圧力(internal pressure)」、「外的圧力(external pressure)」の 3 つの理由を挙げている。Gudjonsson によれば、外的圧力は「説得的な警察の取調べ、警察の行為、身柄が警察に拘束されていること」によって自白することである。内的圧力は「被疑者は自分が犯した罪について罪責感を経験する」時におこる。さらに、証拠の知覚は「警察が自分が罪を犯したことを最終的には証明するであろう」と信じて自白することである(Gudjonsson, 2003, p. 152)。

実際の取調べでは被疑者はこれらの 3 つの自白の理由のうちどれか 1 つの理由だけで自白することはないと思われるが、Gudjonsson & Petursson (1991)によると受刑者のおよそ 55%が証拠の知覚を自白の理由として挙げており、この理由が最も重要な要因であろうと述べている。証拠の知覚の次に重要な要因は内的圧力であり、外的圧力は最も重要ではない(Gudjonsson, 2003; Gudjonsson & Petursson, 1991)。ただし、この外的圧力にまとめられた要因の中で「身柄を警察に拘束されていることへの恐れ」(Gudjonsson & Petursson, 1991, p. 305)が被疑者にとって非常に重要な要因であり、20%以上の被疑者の重要な自白の要因であった。また、同程度の被疑者が警察官の圧迫や説得も重要な自白の要因であると述べていた。一方、警察官への恐

れや暴力を与えるという脅しを重要な自白の要因としたものは 5%に過ぎなかった(Gudjonsson & Petursson, 1991)。

被疑者が自白する理由は罪種によって異なっていた。例えば、性犯罪者は、他の罪種の被疑者と比較して、自白への強い内的圧力のために自白していた。暴力犯罪者、強姦犯、年少者対象性犯罪者を比較した研究(Gudjonsson & Sigurdsson, 2000)では、年少者対象性犯罪者が自白への内的圧力が最も高かった。彼らは強力な証拠があるという認識が低くても、自白への強い内的必要性を感じていたことから、これらの被疑者には、より慎重な取調べ手法が自白に導くことを示していた。

さらに、被疑者の自白後の感情と被疑者の自白理由との間に関係がみられた。外的圧力の結果として自白した被疑者は、自らの自白に不満であり、自白したことを後悔している傾向が高かったが、証拠の知覚と内的圧力から自白した者は、自白に満足している傾向が高かった(Gudjonsson, 2003)。

取調べ手法と自白の理由との関係を考慮すると、支配的な、あるいは攻撃的な取調べのアプローチは、外的圧力のために被疑者が自白する傾向を高める一方、人間的な取調べ(被疑者に対して敬意や親切心を示すもの: Holmberg & Christianson, 2002)のアプローチは、内的圧力のために被疑者が自白することを促進し、それによって、被疑者の満足や心理的健康、自責の念を増すということが予測される。

日本では、渡辺・鈴木(1985)が 1978 年以降取調べを行った殺人(殺人 19 例、強盗殺人 6 例)の事例について自白の動機を検討している。この研究では、自白の動機として、理性的動機と情緒的動機の 2 つをあげており、前者は「自供するに至った主たる動機が、有力な証拠を示されて、共犯者が自白したと知って、否認の不利さをさとってなどで、いわゆる理で落ちたものである」と述べ、後者は「自分の可愛がっている子供や信頼している親族の話を聞かされて、被害者に対する悔悟の念から、取調べ官の説得や取扱いに感激してなどで、いわゆる情で落ちた者である」(渡辺・鈴木, 1985, p. 47)と分類している。この 2 つの動機と被疑者の特徴について検討したところ、前科があり、不安定な職業につき、配偶者のないような者は情緒的な動機により自白する割合が高かったが、配偶者がおり、安定した職業につき、前科がない者の場合には理性的動機により自白する割合が高かった(渡辺・鈴木, 1985)。

さらに、渡辺・横田(1999)は、殺人事件の被疑者 22 名と侵入窃盗事件の被疑者 63 名を対象に自白の理由を検討した。渡辺・横田(1999)は、被疑者を取調べた捜査官に、自白後の被疑者に本当のことを話そうと思った一番の理由は何かを尋ねてもらい、その回答

を検討した。その結果、回答は内容から内発的動機・外発的動機・証明・不利益の軽減の4つに分類できた。これらの分類は上記の Gudjonsson の3分類と類似しており、内発的動機は上記の内的圧力、外発的動機は上記の外的圧力、証明は上記の証拠の知覚にあたる（ただし、外発的動機は Gudjonsson の分類のように必ずしも否定的な意味だけを含んでいるわけではない）。不利益の軽減は自白した方が被疑者にとって有利だと合理的に考えることである。その結果、殺人犯では内発的動機（被疑者が罪悪感を感じて自白するもの）が自白の理由として最も挙げられていたのに対し、侵入窃盗犯の場合では主として外発的動機（取調べ官の態度や取調べ技術などの取調べ官による働きかけにより自白するもの）と証明（証拠があるために、否認しても仕方がないと思って自白するもの）が他の2つの理由より主な自白の理由として挙げられていた。このように、罪種によって自白の理由は異なっていた。ただし、この調査では、取調べ官自身が取調べた被疑者に質問するという形式をとっており、方法論上の問題がある。また、検討した罪種も殺人と侵入窃盗のみであり、サンプル数が少ないという限界もある。

本研究

本研究では Wachi, Watanabe, Yokota, Otsuka, & Lamb (2016a, 2016b) で分析したデータを利用して、警察の取調べを実際に経験した受刑者が、取調べおよび自白の理由についてどのように感じているかを検討することを目的としている。Wachi et al. (2016a) では、受刑者に対して39項目の取調べに関する質問をしたが、取調べ官に実施した調査（Wachi et al., 2014）と同様、5因子、つまり証拠の提示因子（Presentation of Evidence）、対抗因子（Confrontation）、積極的傾聴因子（Active Listening）、関係構築因子（Rapport Building）、事件の話題因子（Discussion of the Crime）、（Appendix）を基に、4つの取調べ手法を見いだした。多面的な取調べ（Undifferentiated-high）、証拠対抗的な取調べ（Evidence-confrontational）、関係重視の取調べ（Relationship-focused）、未分化の取調べ（Undifferentiated-low）の4つの取調べ手法である。Figure 1に示すように、多面的な取調べでは、5因子すべてにおいて高い値を示しており、あらゆる手法を利用した取調べといえる。証拠対抗的な取調べでは、証拠の提示因子と対抗因子

Figure 1. Four interviewing styles based on the prisoners' responses. Adapted from "Japanese interrogation techniques from prisoners' Perspectives," by Wachi et al., 2016a, Figure 1, *Criminal Justice and Behavior*, 43, p. 626.

の得点が高く、受刑者は取調べ官が攻撃的であり、証拠をもって自分たちと対抗する傾向が高いと報告していた。関係重視の取調べでは、積極的傾聴因子、関係構築因子、事件の話題因子の得点が高く、この取調べアプローチを経験した受刑者は、取調べ官が自分たちの話をよく聞き、自分たちと信頼関係を築こうと試みると同時に、事件についても話題にしていたと報告した。一方、未分化の取調べでは、すべての因子の得点が低く、この取調べのアプローチでは、本研究で利用された取調べをあまり取調べ官が利用していなかったと受刑者によって報告されている (Figure 1)。

本研究ではこの 4 つの取調べ手法と自白の理由を検討する。先行研究より、仮説は以下のとおりである。

仮説 1 関係重視の取調べを受けた者は内的圧力から自白する傾向が高い。

仮説 2 証拠対抗の取調べを受けた者は外的圧力から自白する傾向が高い。

方 法

サンプル

殺人、強盗、放火、強姦、強制わいせつ、略取誘拐をして有罪判決を受けた成人男性の新受刑者を対象とした。

全国 36 の矯正施設から合計で 303 の回答が得られたが、多数の質問 (全体の 87%) に回答しなかった 1 名、取調べ時に未成年であった 2 名、上記 6 罪種の犯罪で有罪判決を受けていなかった 9 名を除き、291 名を Wachi et al. (2016a, 2016b) では分析した。本分析では自白の理由を検討することが主目的であるため、291 名のうち「すべて自白した、大部分自白した、一部自白した」とある程度自白したと回答した者のうち、欠損値がなかった 259 名を分析の対象とした。

259 名の受刑者の平均年齢は 36.95 歳 ($SD = 11.75$)、中央値は 35 歳であった。有効回答数 258 名のうち、取調べ時の平均年齢は 35.79 歳 ($SD = 11.93$)、中央値は 33.25 歳であった。受刑者の逮捕時の婚姻形態に関しては、有効回答数 257 名のうち、独身が 59.5% (153 名)、正式な結婚をしていたものが 25.7% (66 名)、内縁関係にあったものが 14.8% (38 名) であった。最終学歴に関しては、259 名の回答者のうち、義務教育のみを終えた者が 20.1% (52 名)、高校中退の者 25.5% (66 名) を含めると、最終学歴が中学卒業の者が 45.6% (118 名) であり、高校卒業の者が 28.2% (73 名)、専門学校卒業の者が 10.4% (27 名)、短大・大学卒業以上の者が 12.4% (32 名) であった。259 名の受刑者のうち、逮捕経験がある者は全体の 49.8% (129 名)、服役経験がある者は全体の 18.1% (47 名) であった。

罪種について回答のあった 255 名のうち、殺人を犯

したものが 13.3% (34 名)、強盗が 36.1% (92 名)、放火が 5.9% (15 名)、強姦が 28.6% (73 名)、強制わいせつが 31.4% (80 名)、略取誘拐が 1.2% (3 名) であった。1 つの事件で複数の罪種にあてはまる場合もあることから、合計人数は 297 名となっている。

手続き

警察庁が最高検察庁を通じて法務省に調査を依頼し、法務省矯正局が 36 の矯正施設を選別し、各矯正施設において特定の人数を選定した。これらの矯正施設へ科学警察研究所より直接調査票を送付した。各矯正施設では、刑務官が上記罪名で入所した成人男性の新受刑者 (ただし知的障害のある者を除く) に対し、刑執行開始時の指導期間中に調査に参加する意図があるかどうかを尋ね、もし受刑者が関心を示した場合には、調査の内容を受刑者に説明し、同意した場合に同意書に署名するように依頼した。その後、調査票を受刑者に手渡した。受刑者は調査票に記入したあと同意書と調査票を封筒に入れ、刑務官に渡し、刑務官が封をしてから直接科学警察研究所に郵送した。刑務官は受刑者に、調査票については刑務所の職員が回答を見ることはないこと、調査票を記入したことにより不利益を受けることがないこと、協力したくない場合は記入しなくて良いこと、調査を拒否することで不利益を受けることがないことを伝えるように指示された。科学警察研究所内の倫理審査を受けて本調査を実施した。研究期間は、2012 年 9 月から 2013 年 5 月であった。詳細な手続きは Wachi et al. (2016a) を参照されたい。

資 料

質問項目の内容は以下の通りである。調査票ではすべての漢字に振り仮名を振り、漢字が読めない受刑者でも回答できるように配慮した。

受刑者についての質問 受刑者の年齢、逮捕時の婚姻形態、最終学歴、逮捕経験と刑務所の服役経験を尋ねた。

事件と取調べの詳細 受刑者が今回有罪判決を受けた事件と、その事件についての取調べの詳細 (事件の罪種、取調べ時の年齢など) を尋ねた。さらに、受刑者が警察の取調べを受ける前に、事件について自白するか否認するかを決めていたかを尋ねた (自白することに決めていた、否認することに決めていた、どうするか決めていなかった、のうち 1 つを選択)。

受刑者が取調べの手法をどの程度経験したかを測定するために 39 項目の質問を尋ねた。この質問は警察官対象の調査 (Wachi et al., 2014) で実施した質問項目と内容は同じであるが、簡単な言葉遣いに修正した。5 件法で 1 = まったくしなかった、2 = ほとんどしなかった、3 = たまにした、4 = よくした、5 = いつもした、で尋ねた。

Table 1
Frequency distribution of the prisoners' reasons for confessing

Reasons for confession	Strongly agree	Agree	Neutral	Disagree	Strongly disagree
1. I confessed because I felt guilty about the crime. (犯罪をしたことに後ろめたい気持ちがあったから)	61.8%	22.8%	8.9%	3.5%	3.1%
2. I believed that there was no point in denying committing the crime. (否認しつづける意味がないと思ったから)	60.6%	22.4%	4.2%	6.6%	6.2%
3. I confessed because I felt I wanted to get it off my chest. (犯行をうちあけてすっきりしたかったから)	52.9%	23.9%	12.7%	5.8%	4.6%
12. I confessed because it was obvious that I had committed the offence. (自分が犯人であることが明らかだったから)	52.1%	23.9%	8.9%	8.1%	6.9%
4. I confessed because I thought the police would eventually prove I committed the crime. (警察が、最終的には自分が犯行したと証明すると思ったから)	27.8%	24.3%	19.7%	15.1%	13.1%
8. I confessed because the police persuaded me it was the right thing to do. (取調べ官が、自白することが正しいことだとあなたを説得したから)	8.1%	13.5%	22.8%	22.8%	32.8%
5. I confessed because of police pressure during the interview. (取調べの間、取調べ官からプレッシャーがあったから)	8.5%	12.7%	24.7%	26.3%	27.8%
6. I confessed because I felt coerced by the interrogator to do so. (取調べ官があなたに自白するように強く言ったから)	6.2%	12.7%	20.1%	26.3%	34.7%
13. I confessed because I had the need to talk to somebody. (誰かに自分が犯行したことを話したかったから)	5.8%	8.5%	22.4%	22.0%	41.3%
10. I confessed because at the time I believed that the interrogator would get angry if I did not confess. (もし自白しなければ取調べ官が怒ると思ったから)	5.8%	6.9%	12.4%	23.6%	51.4%
11. I confessed because I was frightened of being locked up and not free. (留置所に入れられて自由がないことが嫌だったから)	6.6%	5.8%	15.4%	25.5%	46.7%
7. I confessed because at the time I felt I needed help from the police officer. (取調べ官に助けて欲しかったから)	4.6%	6.6%	21.6%	25.5%	41.7%
9. I confessed because I was frightened of the police officer. (取調べ官が怖かったから)	5.0%	5.4%	15.4%	24.7%	49.4%

Note. Total of percentages are not 100% for each item because of rounding.

自白についての質問 警察の取調べで最終的に受刑者がどの程度自白したかを5件法（すべて自白した、大部分自白した、一部自白した、ほとんど自白しなかった、まったく自白しなかった）で尋ねた。調査票では、自白に関する質問の前に、自白とは「逮捕された事実について、その事実を認めて本当のことを話すこと」と定義した。本調査では上記のとおり、「すべて自白した」、「大部分自白した」、「一部自白した」のどれかに回答した者についてのサンプルを分析に利用した。

自白理由 受刑者がなぜ事件のことを話す気持ちになったかを、17項目の質問で尋ねた。各質問は5件法（1＝ひじょうにそうだ—5＝まったくそうでない）で尋ねたが、分析の際には5＝ひじょうにそうだ—1＝まったくそうでない、に変換した。GudjonssonはGudjonsson Confession Questionnaire (Gudjonsson, 2003; Gudjonsson & Bownes, 1992; Gudjonsson & Petursson,

1991; Gudjonsson & Sigurdsson, 1999) を作成・改定し、一連の研究で探索的因子分析を行い、因子に含まれる項目を検討しているが、研究ごとに因子の項目に若干の変動がある。本研究では、3因子に相当する項目として、初期の研究である Gudjonsson & Petursson (1991) で利用されている項目を翻訳・修正して利用した。外的圧力因子は、Table 1の項目で5, 6, 8, 9, 10, 11であり、証拠の知覚因子は項目2, 4、内的圧力因子は項目1, 3, 7である。Gudjonsson & Petursson (1991) では、内的圧力因子としてさらに1項目（あなたは自白後、解放感を感じましたか？）が含まれているが、自白後の気持ちを尋ねているため、本研究では自白の理由としては不適切と考え、内的圧力因子に含まなかった。また、項目7はGudjonssonらの研究では「あなたは当時助けが欲しかったから自白しましたか？ (Did you confess because at the time you felt you needed help?)」と

なっているが、内容が曖昧で誰に助けて欲しいのかわからないため、「取調べ官に助けて欲しかったから」という項目に修正した。

さらに、証拠の知覚因子、内的圧力因子に含まれる項目数が少ないため、Gudjonsson & Sigurdsson (1999) で各因子に含まれた項目 (Table 1 の項目 12 と 13) を本研究では加えた。その結果、証拠の知覚因子は 3 項目 (項目 2, 4, 12)、内的圧力因子は 4 項目 (項目 1, 3, 7, 13)、外的圧力因子は 6 項目 (5, 6, 8, 9, 10, 11) で測定された。本研究では、自白の理由に関する 17 項目のうち、Gudjonsson が提案した 3 因子を構成する 13 項目のみを分析した。

結 果

自白の理由

なぜ事件のことを話す気持ちになったのかを尋ねた結果を Table 1 に示した。半分以上の受刑者が「犯罪をしたことに後ろめたい気持ちがあったから」、「否認しつづける意味がないと思ったから」、「犯行をうちあけてすっきりしたかったから」、「自分が犯人であることが明らかだったから」に「ひじょうにそうだ」と答えている。対照的に、「もし自白しなければ取調べ官が怒ると思ったから」、「取調べ官が怖かったから」という理由に関しては、およそ半数の回答者が「まったくそうでない」と答えている。

Gudjonsson の提案した 3 因子の検討

本研究で検討した項目が、Gudjonsson が提案した 3 因子に分かれるかを検討するために Amos を用いた確認的因子分析を行った。モデルの修正を行ってモデルの適合度を上げた結果、Figure 2 のモデルを採択した。適合度指標は、CFI = 0.970, GFI = 0.952, AGFI = 0.916, RMSEA = 0.056 であり、あてはまりの良いモデルといえる。

証拠の知覚因子と外的圧力因子の係数はすべて統計的に有意になったが、内的圧力因子に関しては、項目 1「犯罪をしたことに後ろめたい気持ちがあったから」と項目 3「犯行をうちあけてすっきりしたかったから」のみ、係数が統計的に有意になった。内的圧力因子が 2 項目となってしまったため、以下では 3 因子の比較をせずに、個々の因子に関して、取調べ手法と自白前の意図の影響が異なるかを検討した。

各因子に対して 2 要因の分散分析 (自白前の意図 (自白、否認・未定) × 取調べスタイル (多面的、証拠対抗、関係重視、未分化)) を行った。証拠の知覚変数に関して、自白前の意図の有意な主効果が見られた、 $F(1, 250) = 18.20, p < .001, \eta_p^2 = .07$ 。交互作用効果、取調べスタイルの主効果は有意ではなかった (交互作用効果: $F(3, 250) = 1.06, p = .368, \eta_p^2 = .01$; 取調べスタイル: $F(3, 250) = 1.29, p = .278, \eta_p^2 = .02$)。取調べ前に自白すると決めていた参加者 ($M = 12.20, SD = 2.46, n = 176$) は、そうではない参加者 ($M = 10.62,$

Figure 2. The results of the confirmatory factor analysis regarding Perception of Proof, Internal Pressure, and External Pressure.

Table 2
Ratings of Perception of Proof, Internal Pressure, and External Pressure by interview style
and prior intentions (Means and Standard Deviations)

Interview style	Prior intentions		Total
	Confess ^e	Not confess ^f	
Perception of Proof			
Undifferentiated-high (多面的) ^a	12.49 (2.17)	10.36 (2.83)	11.63 (2.65)
Evidence-confrontational (証拠対抗) ^b	11.63 (2.19)	9.73 (3.10)	10.71 (2.80)
Relationship-focused (関係重視) ^c	12.10 (2.53)	11.46 (3.11)	11.93 (2.70)
Undifferentiated-low (未分化) ^d	12.29 (2.64)	10.50 (2.76)	11.89 (2.75)
Total	12.20 (2.46)	10.62 (2.97)	11.70 (2.73)
Internal Pressure			
Undifferentiated-high ^a	8.62 (1.30)	7.84 (1.46)	8.31 (1.41) ^{x, y}
Evidence-confrontational ^b	8.44 (1.50)	6.67 (2.16)	7.58 (2.03) ^x
Relationship-focused ^c	9.22 (1.29)	8.38 (2.06)	8.99 (1.58) ^y
Undifferentiated-low ^d	8.62 (1.81)	8.06 (2.24)	8.49 (1.91) ^{x, y}
Total	8.84 (1.51)	7.84 (2.01)	8.52 (1.74)
External Pressure			
Undifferentiated-high ^a	16.78 (6.23)	17.52 (6.61)	17.08 (6.34) ^y
Evidence-confrontational ^b	15.00 (6.48)	15.87 (6.32)	15.42 (6.31) ^y
Relationship-focused ^c	10.72 (3.53)	11.69 (3.78)	10.99 (3.61) ^x
Undifferentiated-low ^d	10.13 (3.74)	14.06 (5.12)	11.01 (4.38) ^x
Total	12.20 (5.30)	14.70 (5.90)	12.99 (5.61)

Note. In the response scale, 1 = strongly disagree, and 5 = strongly agree. Means in columns sharing a superscript x or y are not statistically different at $\alpha = .05$ (Bonferroni corrected).

^a $n = 62$, ^b $n = 31$, ^c $n = 94$, ^d $n = 71$, ^e $n = 176$, ^f $n = 82$.

$SD = 2.97$, $n = 82$) よりも証拠の知覚因子の得点が高かった。

内的圧力に関しては、自白前の意図と取調べスタイルの有意な主効果があった(自白前の意図: $F(1, 250) = 17.30$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .07$; 取調べスタイル: $F(3, 250) = 4.40$, $p = .005$, $\eta_p^2 = .05$)。有意な交互作用はなかった($F(3, 250) = 0.93$, $p = .426$, $\eta_p^2 = .01$)。取調べ前に自白すると決めていた者($M = 8.84$, $SD = 1.51$, $n = 176$)は、そうでない者($M = 7.84$, $SD = 2.01$, $n = 82$)よりも内的圧力因子の得点が高かった。多重比較(Bonferroni 手法)の結果、関係重視のグループ($M = 8.99$, $SD = 1.58$, $n = 94$)は、証拠対抗のグループ($M = 7.58$, $SD = 2.03$, $n = 31$)よりも内的圧力因子の得点が高かった。

最後に、外的圧力因子に関しては、自白前の意図と取調べスタイルの有意な主効果が見られた(自白前の意図: $F(1, 250) = 5.37$, $p = .021$, $\eta_p^2 = .02$; 取調べスタイル: $F(3, 250) = 19.51$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .19$)。交互作用効果は有意ではなかった($F(3, 250) = 1.26$, $p = .289$, $\eta_p^2 = .02$)。取調べより前に自白することに決めていた者($M = 12.20$, $SD = 5.30$, $n = 176$)は、そうで

ない者($M = 14.70$, $SD = 5.90$, $n = 82$)よりも、外的圧力因子の得点が低かった。Bonferroni の多重比較の結果、関係重視の取調べのグループ($M = 10.99$, $SD = 3.61$, $n = 94$)は、多面的取調べ($M = 17.08$, $SD = 6.34$, $n = 62$)と証拠対抗の取調べ($M = 15.42$, $SD = 6.31$, $n = 31$)のグループよりも、外的圧力因子の得点が低かった。未分化の取調べのグループの参加者($M = 11.01$, $SD = 4.38$, $n = 71$)はまた、多面的な取調べのグループ、証拠対抗の取調べのグループよりも外的圧力因子の得点が低かった。各因子に対する群ごとの得点の平均値は Table 2 に示してある。

考 察

本研究では、受刑者の取調べ前の意図と取調べ手法によって自白の理由が異なるのかを検討した。Gudjonsson と共同研究者(Gudjonsson & Bownes, 1992; Gudjonsson & Petursson, 1991; Gudjonsson & Sigurdsson, 1999; Sigurdsson & Gudjonsson, 1994)によって提案された3つの因子を確認的因子分析で調べたところ、Gudjonsson が提案した3因子のうち、証拠の知覚因子・外的圧力因子は再現できたが、内的圧力因子のうち、

項目 7「取調べ官に助けて欲しかったから」と項目 13「誰かに自分が犯行したことを話したかったから」は他の 2 項目と内的圧力因子としてまとまらなかった。項目 13 に関しては、Sigurdsson & Gudjonsson (1994) および Gudjonsson & Sigurdsson (1999) においては内的圧力因子にまとまったが、Gudjonsson & Petursson (1991) と Gudjonsson & Bownes (1992) では著者らが内的圧力因子と予想していたにもかかわらず、内的圧力因子にまとまらなかった。また、後者の 2 研究においては、項目 7 の因子負荷が内的圧力因子にまとまった因子の中で最低であった。この結果から、もともと項目 7 と項目 13 は、内的圧力因子の概念を強く表していない可能性がある。

Gudjonsson (2003) は内的圧力の自白理由が精神分析の自白モデルをある程度支持していると述べているが、精神分析の自白モデルでは、犯罪者は自らの行為に内的葛藤や罪悪感を覚え、自白することによって罪悪感から解放されたいと思い自白するが、それは警察官のような権威者に自白する方がよりカタルシス効果があるというものである (Gudjonsson, 2003)。内的圧力因子としてまとまった項目 1「犯罪をしたことに後ろめたい気持ちがあったから」および項目 3「犯行をうちあけてすっきりしたかったから」は内面への意識に着目しており、精神分析モデルで述べているような自白することで内的葛藤や罪悪感から解放されたいという犯罪者の気持ちを表していると思われるが、今回まとまらなかった項目 7 と項目 13 は第三者の存在が意識されており、第三者、特に警察官のような権威者に自白することが本研究の参加者にとっては更なるカタルシス効果に結びつかなかった可能性が考えられる。ただし、本研究では項目 7 を「取調べ官に」助けて欲しかったから、と修正したことが影響している可能性もあり、この結果が、翻訳の問題なのか、日本特有の結果であるのか、または今回の参加者だけにあてはまることなのかを知ることは難しい。これらを検討するためには、今回対象とした罪種とは異なる罪種で有罪になった受刑者など、新たな受刑者に自白の理由を再度調査し、内的圧力因子の再現性を検討することが必要であろう。

取調べより前に自白する意図がなかった受刑者は、自白することを決めていた受刑者よりも、証拠の知覚や内的圧力のために自白する傾向が低く、外的圧力で自白する傾向が高かった。この結果は Gudjonsson & Bownes (1992) の結果と一致している。彼らは北アイルランドの 80 名の男性受刑者を対象に質問紙調査を実施しているが、もともと自白する意図がなかった回答者は外的圧力のために自白をしたと報告する傾向が高く、内的圧力や証拠の知覚のために自白したと報告する傾向は低かった。

さらに、関係重視の取調べを受けたグループの受刑

者は、証拠対抗の取調べを受けたグループの受刑者よりも、内的圧力から自白する傾向が高かった。対照的に、関係重視と未分化の取調べを受けた受刑者は、多面的や証拠対抗の取調べを受けた受刑者よりも、外的圧力から自白する傾向が低かった。Wachi et al. (2016b) の研究では、本研究で利用された 4 つの取調べスタイルと自白の程度について検討した結果、多面的な取調べと関係重視の取調べ手法が、被疑者の特性（年齢・婚姻の有無・服役経験など）や被疑者の証拠の知覚の影響をコントロールしても、もともと自白する意図のなかった被疑者の完全自白を促進したという結果を示した。さらに、Wachi et al. (2016b) では、関係重視の取調べを受けた受刑者は、自らの自白に満足している傾向が高く、裁判でも犯罪を認める傾向が高かった。

本研究の結果は、多面的な取調べと関係重視の取調べスタイルが自白を促進したとしても、自白の理由は 2 つのグループで異なっていることを示唆している。つまり、多面的な取調べを受けた受刑者は、外的な圧力で自白したと報告する傾向がより高かったのに対し、関係重視の取調べを受けた受刑者は内的な圧力のために自白したと報告する傾向がより高かった。この結果は、仮説 1 を支持しているといえる。また、証拠対抗の取調べを受けた受刑者は外的圧力のために自白したと報告する傾向が高かったことから、仮説 2 も支持された。

本研究および Wachi et al. (2016a, 2016b) の結果をまとめると、関係重視アプローチによる取調べを経験した受刑者は、内的圧力のために自白する傾向が高かった。彼らは内的圧力の反応として、自白により満足している傾向があった。さらに彼らは犯罪を認めた後、捜査に協力的になり、自白に満足していたがために裁判でも犯罪を認めたといえる。この結果は、外的圧力は受刑者が自白に満足していないことと関係し、内的圧力は受刑者の自白の満足と関係していることを示した Gudjonsson & Petursson (1991) や Gudjonsson & Bownes (1992) の研究を部分的に支持していた。

このように、受刑者の自白率だけではなく、自白の理由、自白への満足度、裁判での自白のような他の要因も考慮すると、一連の研究 (Wachi et al., 2016a, 2016b, および本研究) からは関係重視アプローチによる取調べが好ましい可能性が示唆されたといえる。これらの結果は、受刑者を対象に実施した調査票から得られたものであるが、本研究で対象とした罪種で逮捕された被疑者を取調べた警察官に実施した調査 (Wachi et al., 2014) においても、関係重視アプローチはなかなか自白しない被疑者を完全自白に導く傾向がみられ、また警察が知らなかった情報を提供する傾向が見られた。このように、取調べをする側、受けた側、両者の結果がある程度一致していることから、この結

果の妥当性は示されているといえる。

本研究は、著者の知る限り、取調べを経験した受刑者に対して質問紙調査を行った日本で初めての研究である。取調べを受けた受刑者自身が自らの自白の理由や感情について回答しているため、本研究からは貴重な知見が得られたといえよう。ただし、この研究には以下のような問題点がある。第一の問題点として、本研究は自己記述式質問紙を利用したため、回答が受刑者の認識を表しているに過ぎない点である。本研究では取調べ手法と自白の理由について検討しているが、これらはあくまでも受刑者が認識しているものであるため、回答が必ずしも事実とは一致していない可能性がある。実際に利用された取調べ手法と自白の理由との関連を見るためには、取調べ場面の録画映像等を分析する必要があるだろう。

第二に、本研究では受刑者が回答した質問紙を刑務官に提出したことも問題点としてあげられる。受刑者の回答が社会的望ましさの影響を受けることを避けるために、受刑者が調査票を封筒に入れ、封をした状態で刑務官に調査票を提出できることが理想的であったが、刑務所での手続き上、受刑者が封をすることは不可能であった。調査票実施において、刑務官が調査票の結果を見ないということを受刑者に説明したが、それでも受刑者の回答に影響を与えた可能性はあるだろう。

第三の問題として、自白の理由についての質問項目数が少なかったことがあげられる。本研究では、Gudjonssonの自白の理由の3因子に主として着目したが、本研究で測定しなかった理由が存在する可能性が考えられる。今後の研究ではさらに項目を増やして検討する必要があるだろう。第四に、本研究では回答者が取調べを受けた直後に回答していないため、受刑者の取調べについての記憶が曖昧になり、回答が正確ではなくなってしまった可能性がある。取調べを受けた直後の被疑者に質問票に回答してもらうことは手続き上困難であったため、刑が確定した後の新受刑者に対して調査を実施したが、本研究で対象にしているような凶悪事件の場合には、裁判が長引く可能性があり、かなり前に経験した取調べについて回答する受刑者もいた。参加者のうち72%の者が1年未満に、18%の者が1年以上2年未満に、10%の者が2年以上前に取調べを受けていたが³、取調べ直後と比較して取調べや当時の感情についての記憶が正確ではなくなってしまいう可能性は考えられるだろう。

本研究では取調べや自白の理由に関する受刑者の認識について一定の知見が得られたが、対象は男性の凶

悪犯罪者という限られた集団だけであった。この結果が日本の取調べ一般や被疑者について一般化できるかどうかを検討するためには、今後異なるタイプの犯罪者に対しても調査を実施する必要があるだろう。例えば渡辺・鈴木(1985)では、前科の有無で被疑者の自白理由が異なることが示されている。累犯者等、何度も取調べを受けている被疑者の場合には、取調べの経験が既にあるために取調べ官の態度や取調べ手法、自白の理由が異なる可能性が考えられる。複数回警察に逮捕された累犯者を対象にした調査を実施し、初犯の被疑者との差異が認められたならば、被疑者の特性に合わせた取調べの手法を実務で活用していくことが可能になるであろう。また、これまでの研究では主として被疑者と取調べ官の二者関係だけに着目してきたが、共犯事件の場合には、共犯者の存在も取調べ手法や被疑者の自白理由に影響を与えると思われる。これらの犯罪者に着目した取調べに関する研究は著者の知る限り日本では存在しないが、今後は検討を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- 栗野 友介 (2014). 取調べ技術総合研究・研修センターにおける研修等の実施状況 警察学論集, 67, 21-33.
- Gudjonsson, G. H. (2003). *The psychology of interrogations and confessions: A handbook*. Chichester, UK: Wiley.
- Gudjonsson, G. H., & Bownes, I. (1992). The reasons why suspects confess during custodial interrogation: Data for Northern Ireland. *Medicine, Science and Law*, 32, 204-212.
- Gudjonsson, G. H., & Petursson, H. (1991). Custodial interrogation: Why do suspects confess and how does it relate to their crime, attitude and personality? *Personality and Individual Differences*, 12, 295-306.
- Gudjonsson, G. H., & Sigurdsson, J. F. (1999). The Gudjonsson Confession Questionnaire-Revised (GCQ-R): Factor structure and its relationship with personality. *Personality and Individual Differences*, 27, 953-968.
- Gudjonsson, G. H., & Sigurdsson, J. F. (2000). Differences and similarities between violent offenders and sex offenders. *Child Abuse and Neglect*, 24, 363-372.
- Holmberg, U., & Christianson, S. Å. (2002). Murderers' and sexual offenders' experiences of police interviews and their inclination to admit or deny crimes. *Behavioral Sciences and the Law*, 20, 31-45.
- 菅 潤一郎・堤 博喜・小笠原 正男・片野 覚 (2012). 警察における取調べの録音・録画の試行の拡充について 警察学論集, 65, 47-72.
- Leo, R. A. (1996). Inside the interrogation room. *Journal of Criminal Law & Criminology*, 86, 266-303.
- Sigurdsson, J. F., & Gudjonsson, G. H. (1994). Alcohol and drug intoxication during police interrogation and the

³ 証拠の知覚因子、内的圧力因子、外的圧力因子に対して、これらの3群における平均値の差を比較したが、統計的に有意な差はみられなかった ($p > .063$)。

- reasons why suspects confess to the police. *Addiction*, 89, 985–997.
- Soukara, S., Bull, R., Vrij, A., Turner, M., & Cherryman, J. (2009). What really happens in police interviews of suspects? Tactics and confessions. *Psychology, Crime and Law*, 15, 493–506.
- 田崎 仁一 (2013). 心理学的知見に基づく取調べ 警察学論集, 66, 37–59.
- Wachi, T., & Watanabe, K. (2015). Current practice of Japanese interrogation. In D. Walsh, G. Oxburgh, A. Redlich, & T. Myklebust (Eds.), *International developments and practices in investigative interviewing and interrogation: Volume II: Suspects* (pp. 56–67). London: Routledge Press.
- Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., Otsuka, Y., Kuraishi, H., & Lamb, M. (2014). Police interviewing styles and confessions in Japan. *Psychology, Crime and Law*, 20, 673–694.
- Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., Otsuka, Y., & Lamb, M. (2016a). Japanese interrogation techniques from prisoners' perspectives. *Criminal Justice and Behavior*, 43, 617–634.
- Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., Otsuka, Y., & Lamb, M. (2016b). Japanese suspect interviews, confessions, and related factors. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 31, 217–227.
- Walsh, D., & Bull, R. (2012). Examining rapport in investigative interviews with suspects: Does its building and maintenance work? *Journal of Police and Criminal Psychology*, 27, 73–84.
- 渡辺 昭一・鈴木 昭弘 (1985). 黙秘又は否認した被疑者の自供に至る心理過程——1. 殺人被疑者の事例を中心として—— 科学警察研究所報告法科学編, 38, 44–51.
- 渡辺 昭一・横田 賀英子 (1999). 否認被疑者の自供に至る心理——4. 自供の心理—— 科学警察研究所報告防犯少年編, 40, 48–52.
- 2016. 4. 15 受稿, 2016. 7. 16 受理 ——

Appendix

Items included in the five factors

Presentation of Evidence

- ・ Implying that there was evidence of guilt
 - ・ Confronting you with actual evidence
 - ・ Showing you photographs of the crime scene and/or victims
 - ・ Stating differences between your story and a witness' version
-

Confrontation

- ・ Becoming angry at you
 - ・ Raising his or her voice during the interview
 - ・ Interrupting your denials and objections
 - ・ Treating you in a friendly and strict manner
 - ・ Telling you that the police officer knew you were lying
-

Active Listening

- ・ Listening to your life stories, such as personal history
 - ・ Listening to your stories about your significant others (e.g., parents, spouse, and children)
 - ・ Listening closely to your words
 - ・ Listening attentively to your stories, even if they were not directly related to the case
 - ・ Getting well-versed about your history and/or situations beforehand
 - ・ Talking about your future, e.g., making a fresh start
-

Rapport Building

- ・ Trying to form a good relationship with you beyond that of a suspect and police officer
 - ・ Being friendly to you
 - ・ Respecting you as a human being
 - ・ Speaking about his/her own (interrogator's) personal story
 - ・ Trying to find something the police officer and you had in common
 - ・ Drawing a line between the police officer and you (Reversed)
 - ・ Showing the attitude that the police officer believed what you had said
 - ・ Appealing to your self-interest
-

Discussion of the Crime

- ・ Trying to make you think about the meaning of the crime committed
 - ・ Speaking to your conscience
 - ・ Speaking about the victim
 - ・ Emphasizing the serious nature of the crime you had committed
-